

離婚後の子の養育の在り方に関する実証的調査研究 —— 養育費・面会交流・適応などの観点から

福井大学子どものこころの発達研究センター教授 友 田 明 美

I はじめに

本調査研究は、父母の離婚や離別後の親子間の交流や接触、子育ての在り方がその後の子どもの成長・発達にどのような影響を与えたかを、20代から30代の若者2,000名にアンケート調査をすることによって明らかにしようとするものである。しかし、今回の取りまとめでは、時間の関係から関連データをクロス集計して分析することまではできておらず、離別後の子どもと家族の類型による傾向の違いを明らかにすることまではできなかった。

II 面会交流と子どもの体験等との関係

山口報告にもあるとおり、まず最終学歴、就業状況、年収、配偶者や子供の有無、離婚後の同居人と面会交流の関係について、離婚後に別居親との交流があった子どもたち（以下、「交流あり群」と略）と交流がなかった子どもたち（以下、「交流なし群」と略）とで有意差を認めなかった。

次に、離婚後に体験したこと——家事負担、経済的苦労、習い事への影響、同居親との疎遠、転居、人間関係の不適応、離婚を隠した経験、非行と家庭内暴力、不登校・いじめについても、交流あり群と交流なし群とで有意差を認めなかった。

さらに養育費の支払いについては、交流あり群が交流なし群よりあったとする回答が多かったものの、父母間の関係が良かったために養育費が支払われ、面会交流が行われたなどの可能性もあり、面会交流が養育費の支払いを促したという関係は認められなかった。

その他、父母の離別時に決めて欲しかった項目として、交流あり群で面会交流等について決めて欲しかったという回答が多く、交流なし群で少なかったという結果であった。このことから、取り決めなしという父母の対応が交流なし群では不都合が少なく、交流あり群で多かったということが示唆される。

III 4点に関する分析

本稿では、特に以下の4点について分析した。

1 面会交流によって、養育費の支払いが進んだと言えるか？

「SC. 4 直接交流があったか」により交流あり（Interaction）群と交流なし（no_Interaction）群に分割した。

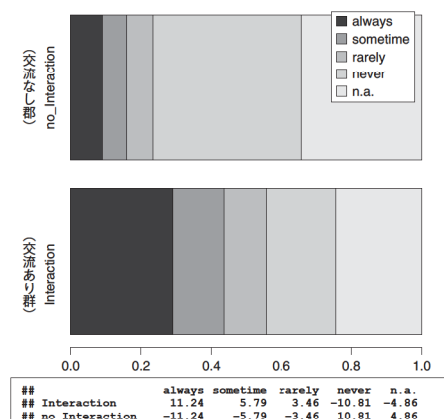
「Q24 生活費・養育費の支払いはありましたか」の回答の群間差を χ^2 検定を行ったところ、 $\chi^2(4)=240.21$, $p=0$ 回答の割合に群間差が存在した。どの回答に群間差が存在するかを知るため、残差分析を実施した（【図1】）。

その結果、交流あり群では養育費の支払いが「あった」、「時々あった」、「ほとんどなかった」の回答が有意に多く、一方で交流なし群では養育費の支払いが「全くなかった」、「わからない」の回答が有意に多かった。

上記結果から、面会交流があると養育費の支払いが促進されるとも解釈できるが、逆に養育費の支払いが可能な家庭では面会交流が行われたとも解釈できるため、面会交流と養育費の支払いの因果関係は今回の調査から判断できない。すなわち養育費に関しては、養育費が支払われているケースで面会交流が行われているものが多いという関係は認められたが、原因－結果の関係は確認されなかった。

また、国内のひとり親調査（厚生労働省、『平成28年度 全国ひとり親世帯等調査結果報告』, H29.12.15)によると、母子家庭で面会交流をしていない理由として「相手（父）が面会交流を求めてこない」という理由が一番大きいことが明らかになっている。そのため、今回の結果は「養育費を払いたくない父親が、面会交流を望まない」、つまり別居親が会いたくないという解釈も可能ではないかと考えられる。

【図1】「Q24 生活費・養育費の支払いはありましたか」に関する帯グラフ
 および標準化された調整残差係数

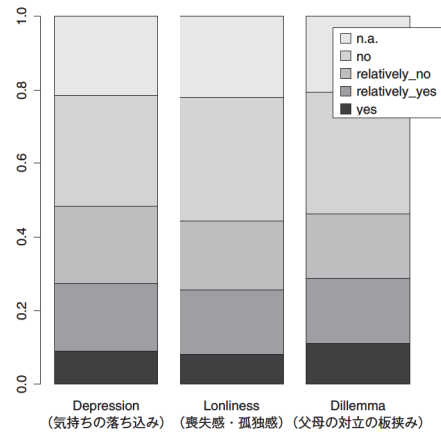


2 面会交流を否定的体験とした子どもが20%前後いたことに関する検証

「Q33 別居親と交流してどういった影響があったか（気持ちの落ち込み、喪失感・孤独感、父母の対立の板挟み）」の3項目を検証した（【図2】）。

面会交流によって、気持ちの落ち込みなどのネガティブな影響があった個人は20%前後いた。その個人差の一部は、後述する離別前の経験によって説明される。

【図2】「Q33 別居親と交流してどういった影響があったか（気持ちの落ち込み、喪失感・孤独感、父母の対立の板挟み）」の3項目



3 離別前の小児期の被虐待経験が、面会交流にどう影響したか？

「Q13. 8 離別前の父親からの虐待・ネグレクトがあったか」, 「Q14. 8 離別前の母親からの虐待・ネグレクトがあったか」の得点と, 「Q33 別居親と交流してどういった影響があったか（アイデンティティ, 嬉しさ, 安堵感, 気持ちの落ち込み, 喪失感・孤独感, 父母の対立の板挟み, 何も思わない）」の得点の相関係数について, それぞれ検討した。ただし, 「5 (回答できない・わからない)」は事前に削除した。

その結果, 父親, 母親から離別前に虐待・ネグレクト経験があると, 交流によって気持ちの落ち込み (Depression), 喪失感・孤独感 (Loneliness), 父母の対立の板挟み (Dilemma) を感じやすいことがわかった (すべて $p<.001$) (【表A, B】)。

すなわち, 虐待・ネグレクトをした親との面会交流は, 子どもの精神的健康に害をもたらすと推察できる。

【表A】 父親からの虐待・ネグレクトと面会交流の影響

term	father_abuse	Identity	Happy	Safe	Depression	Loneliness	Dilemma	Indifference
father_abuse								
Identity	.11							
Happy	-.01	.65						
Safe	-.01	.70	.87					
Depression	.25	.51	.41	.48				
Loneliness	.26	.51	.45	.49	.83			
Dilemma	.22	.44	.43	.45	.66	.67		
Indifference	.19	.28	.19	.22	.43	.43	.41	

【表B】 母親からの虐待・ネグレクトと面会交流の影響

term	mother_abuse	Identity	Happy	Safe	Depression	Lonliness	Dilemma	Indifference
mother_abuse								
Identity	.12							
Happy	.03	.65						
Safe	.05	.70	.87					
Depression	.16	.51	.41	.48				
Lonliness	.19	.51	.45	.49	.83			
Dilemma	.20	.44	.43	.45	.66	.67		
Indifference	.12	.28	.19	.22	.43	.43	.41	

4 面会交流した子どもは成長後の適応が良かったか？

離婚後の子どもたちのその後の適応に関して、面会交流の有無で2群間比較を行った。「Q20 あなたの父母の離婚・別居によって、あなたが感じたこと」の10項目（「平穏・安全な生活」、「喜び、安堵感」、「健康状態の良好」、「家で家族とくつろぐ時間とゆとり」、「無力感、孤立感」、「不安・緊張によるストレス」、「両親間の板挟み」、「自分が対立原因になっていないかへの心配」、「不眠・動悸・めまいなどの健康状態の悪化」、「気分の落ち込み、つらさ」）について、交流あり群、交流なし群の間で対応のない t 検定を実施した（【表C】）。

「あった」= 4, 「どちらかといえばあった」= 3, 「どちらかといえばなかった」= 2, 「なかった」= 1, 「わからない・覚えていない」= 欠損値として前処理している。
 (参考 「グループごとの平均値の差を標準化した効果量 (Cohen's d): .2 「効果が小さい」, .5 「効果が中程度」, .8 「効果が大きい」)

その結果、全体的に、交流あり群の方が成長後の適応が悪いことが明らかになった。両群間の比較において、5%水準で有意だった項目の効果量 (Cohen's d) は、「喜び、安堵感 ($d=0.13$)」、「両親間の板挟み ($d=0.47$)」、「自分が対立原因になっているかの心配 ($d=0.21$)」、「気分の落ち込み ($d=0.13$)」となった。

「Q33 別居親と交流してどのような影響があったか」として「父母の対立の板挟み」を挙げる（「あった」、「どちらかといえばあった」）のは約3割であることが明らかになった。また、「Q35 別居親との交流がなかった・続かなくなったことへの影響」で「父母の対立の板挟み」を挙げるのは約1割しかいない。以上よりおそらく、交流あり群が全員板挟みを感じているわけではないので、板挟みを感じることと面会交流の肯定的な評価はある程度独立している可能性もあると思われる。

【表C】

Characteristic	Interaction, N = 1,000 ¹	no_Interaction, N = 1,000 ¹	p-value ²
Safety	2.70 (1.01)	2.73 (1.05)	0.6
Joy	2.37 (1.02)	2.51 (1.09)	0.007
Improving health	2.66 (1.01)	2.71 (1.05)	0.4
Relaxation at home	2.47 (1.04)	2.57 (1.06)	0.067
Powerlessness and isolation	2.29 (1.07)	2.22 (1.13)	0.15
Stress from anxiety	2.32 (1.07)	2.25 (1.11)	0.2
Conflict between parents	2.10 (1.09)	1.62 (0.95)	<0.001
Worry about conflict	1.76 (0.97)	1.56 (0.91)	<0.001
Worsening of health	1.63 (0.90)	1.55 (0.91)	0.091
Depression	2.11 (1.08)	1.97 (1.11)	0.010

¹ Statistics presented: Mean (SD)
² Statistical tests performed: t-test

参考 Cohen's d: .2「小」, .5「中」, .8「大」

IV その他

前述のとおり、本調査のデータを詳細に分析する時間的な余裕がなかったが、単純集計に加え、同居親別に見ると、以下のようなことも気付かれた。

- ・（Q 4, Q 5） 父と同居していた男性は未婚率・子どもがいない割合が高く、女性は既婚率・子どもがいる割合が高かった。
- ・（Q 9） 父母の様子で、父から母への暴力は約2割であった。
- ・（Q 8） 親の再婚相手・交際相手への心証は「良かった」が選択されにくい（他の同居者には「良かった」が最大になる）。
- ・（Q 9） 父母間の喧嘩には女兒のほうがあったと答えやすい（両親の喧嘩に敏感だった可能性もあり得る）ことが推察された。
- ・（Q12） 離別前の子どもとの良い関係は、母が約80%＞父が約56%であった。
- ・（Q13, Q14） 親子関係を見ると、「1 安定受容」が母約72%＞父約41%、「2 配慮」が母約62%＞父約24%、「3 主体性尊重」が母約60%＞父約33%、「4 信頼関係」が母約64%＞父約32%、「5 過保護」が母約38%＞父約16%、「6 無関心」が母約14%＜父約22%、「7 巻き込み」が母約22%＞父約15%、「8 虐待」が母約12%＝父約12%であった。

以上より、離別前、子どもは母親をより信頼していることが多いと推察された。

- ・（Q18） 離別までの会話の敬遠について、母約13%＜父約36%で父との会話の敬遠が高かった。
- ・（Q20） 父親と同居した人に「喜び・安堵」や「時間とゆとり」が「なかった」と回答

した人が多かった。父親と同居する女兒は「気分の落ち込み、つらさ」を感じた人が多かった。

別居離婚後の子の心理的体験は、「1 平穏・安全」が約5割,「2 安堵」が約4割と高い。以下,「3 健康状態」,「4 くつろぎ」も約4～5割に上っており,半数の子にとって,別居離婚はほっとする体験とされた。

他方,ネガティブな心理体験も「あった」より「なかった」が多い。「5 孤立感」があり約36%<なし約47%,「6 不安緊張」があり約38%<なし約46%,「7 板挟み」があり約23%<なし約59%,「8 自分が原因かの心配」があり約17%<なし約65%,「9 不眠等」があり約14%<なし約68%,「10 気分の落ち込み」があり約30%<なし約53%であった。

以上より,別居離婚では否定的な心理体験をしない子の方が多かったと推察される。

- ・(Q21) 父母の対立で一番頼りになった人は,母親約17%>父親約3%と,母親への信頼が多かった。
- ・(Q23) 離婚の生活への影響について,「経済状態は悪くなった」が「生活は良くなった」との回答が多かった。
- ・(Q24) 母親が別居親の場合は養育費・生活費の支払いが少なかった(そもそも取り決めがなかったのか,履行されなかったのかは不明である)。一般的に,女性は低賃金で非正規雇用も多いため,母の支払いが少なかったのは収入が少ないことの反映かも知れない。
- ・(Q26) 別居親との手紙・メール,写真のやりとりは,父と同居している女性(別居している母と連絡を取る)で満足度が高いことから,女性の場合,同性の親との接触がより大事であると推察された。一方で,別居親との交流の評価を「嫌だった」と回答したのは10%前後,「退屈だった」を合わせると10数%～30%くらいあったことは,必ずしも子どもが面会交流を望んでおらず,大人目線で物事が進んでいる可能性が示唆された。
- ・(Q33) 別居している同性の親と会うと,「アイデンティティ・自己肯定感」への影響があった率が高かった。しかし,面会交流がなかった・続かなかったことでアイデンティティ・自己肯定感に影響があったという回答は,約16%しかなく,残り約84%はなかった・わからないという回答であった(Q35単純集計)。

また,「1 アイデンティティ」があり約36%≒なし約35%,「2 うれしさ」と「3 安堵」がなかったのは約30～35%,「4 気持ちが落ち込んだ」のが約27%,「5 喪失・孤独感」があったのは約26%,「6 板挟み」があり約29%<なし約51%と,約3割の面会交流には子どもにとっては積極的な効用がないことが示唆された。

- ・(Q34) 面会交流がなかった・続かなかった理由について,約11%が別居前の別居親によるDV・虐待を挙げていることが分かった。安全が理由で面会交流を実施しなかった者がそれだけいるということを反映していることが示唆された。
- ・(Q35) 面会がなかった・続かなかったことで,ネガティブな影響がなかった・わから

ないとする者がおよそ4分の3以上もいることも判明した。

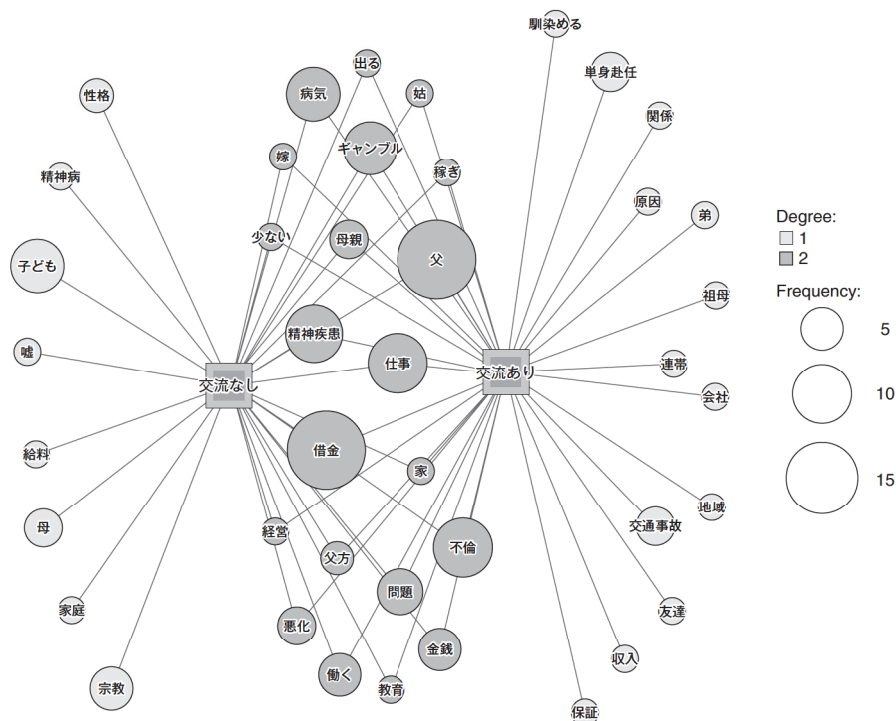
- ・(Q36) 子どもが必要だと思う支援は、別居親と子の関係改善支援が約3分の1であるが、他方で別居親と関わらなくていい安心・安全な生活、トラウマからの回復もそれぞれ約3分の1であった。「1つのみ」の回答でも、「安心・安全な生活」と「トラウマからの回復」と約27%が別居親との接触に心理的困難を覚え、安全を切実なニーズとしていたことがわかる。なお、「別居親とのコミュニケーションや適切な距離の取り方」には、別居親との適切な距離が取れない悩みを反映している可能性があり、「緊張・不安・ストレスの軽減」も別居親との交流によるものが含まれている可能性もあると考えられる。

以上より、子どもにとって、面会交流の影響は非常にデリケートで、ケースごとに多面的に、かつ丁寧に吟味する必要があると考えられた。

(参考) テキストマイニングによる自由記述データの評価

サンプル数が100名を超えている「父母の離婚原因」「別居親と交流が無かった/続かなかった理由」「必要とした心理的支援」の3項目で、報告されたテキストを解析した(【図3A, B, C】)。ただし、テキストマイニングの結果はあくまで「その他」に記載されたもので、もともとの選択肢の回答結果の方が議論の優先順位としては高い。

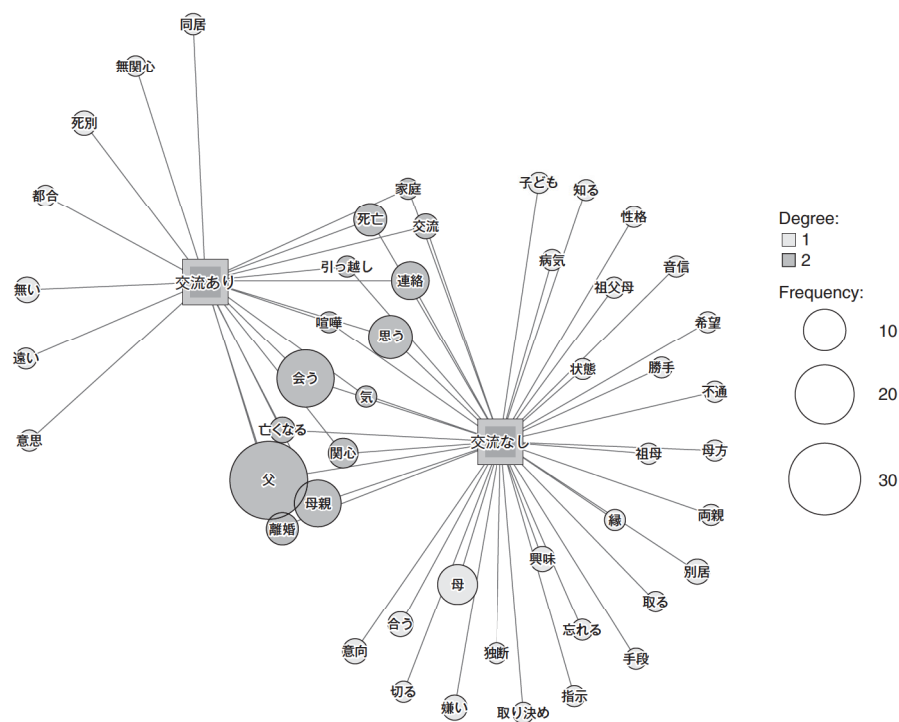
【図3A】 離婚の原因



「父母の離婚原因」では、「父」,「借金」,「親の精神疾患」が面会交流の有無に限らず報告されていた（【図3 A】）。また, 交流なし群では性格や宗教, 交流あり群では単身赴任や交通事故などが際だって浮上した。

次に, 「別居親と交流が続かなかった/なかった理由」としては, 面会交流の有無に限らず「母親」より「父親」, 「会う」, 「興味」・「関心」・「連絡」がないという単語を含んだ自由記述が多かった（【図3 B】）。

【図3 B】 交流が続かなかった理由／なかった理由



「必要とした心理的支援」に関する自由記述では、面会交流の有無に限らず、特に必要としないという回答が圧倒的に多く、次に「金銭（お金）」、「必要」、「父親」というキーワードが多かった。一方、交流なし群で特徴的なのは、「物心」や「経済」という生活費に関連するキーワードが含まれており、養育費の支払いが停滞していた可能性も否定できない（【図3C】）。交流あり・なし両群で、経済的な困難が共通に多く語られていることがわかった。

【図 3 C】 心理的支援

